

第3回 愛育会見学会

園長 藤本光世

4月30日に愛育園見学会を開催しました。愛育園を知ってもらい分かってもらう学生さんを増やすことが、応募に結び付くと2年前から始めました。

私は、愛育園のような中舎制園舎により、集団的力動を使って養育することこそ、社会的養護の目的にかなっていることを話そうと思いました。少し厳しい言い方ですが、里親制度や小舎制はいずれ破綻すると話し、その理由を三つ挙げました。

1. 「〇〇したら、△△になる」は、△△はしないということである。
2. 仕事を開くことこそ重要である。
3. 直接支援職員と調理職員の分業でこそ子どもに最善の利益をもたらすことができる。それぞれについて説明します。

1 について

このことは、もちろん家庭的養護推進計画で、『里親委託や小舎制施設が子どもの最善の利益』と言っている人に対する反論です。

私は保護司をしています。薬物依存症の対象者（保護観察期間5年）を持ち、対象者を知るために依存症について学びました。依存症の方は、嘘八百どころか嘘八百万でいつもどうやって嘘をつこうかと考えているのです。（「やめられない ギャンブル地獄からの生還」（帯木蓬生）集英社）究極の嘘は「明日になったら必ずやめるから、今日を最後とするから、許して」です。これは、永遠にやめないと宣言しているに等しい。明日になると、明日が今日になり、明後日が明日になる。だから、やめない。ところが、お人よしは騙されてしまう。

だから、「里親委託とか小舎制施設」という前提があって、そうなれば子どもの最善の利益ですよといっている人は、子どもの最善の利益となることをしないということです。「今、出来ないで、いつできるのか。」です。きれいな言葉で、今という現実から逃げてはいけません。そして、そうすれば国の施策と叶い、お金を貰えると動いてはいけません。今を疎かにしたことの被害は子どもと職員が受けるのです。

2 について

この仕事は、子どもの心に対して職員の心が働きかける仕事です。学校では教えてくれません。唯一の学ぶ方法は、子どもとぶつかってみて、他の職員の方法を見て、仕事の中で勉強するのです。自己流では失敗して、『人罪』になってしまうのです。子どもを間違った導き方をしてしまう。（『人罪』については、圓福5月号の養育随想をご覧ください。）

なぜ、自己流の子育ては人罪になってしまうのでしょうか。それは、子どもの心が乳幼児期に愛着形成がなされていないために、まず安全・安心を確認して、職員との間に愛着の再形成をしなければならないからです。心は、自分で形成するのです。他人が形成することは出来ません。病気も同じですね。薬はお助けマンで、治すのは自分です。心も同じです。すべての行動は心から生じます。（『心は病気』（アルボムッレ・スマナサーラ）KAWADE 夢新書）子どもの心の形成のお助けマンこそ私たちの仕事です。

愛着形成は子どもの心の問題です。子どもが自分で愛着の再形成をしない限り、問題は解決しない。ところが、心は頑固ですからこれがとっても難しいことは、きっとお分かりになっていただけるでしょう。自己流ではできないのです。一人ではできない。みんなで正しい方法（愛育園のように）で力を合わせて、やっとならざるを得ないかなのです。でも、やらなければならない。その方法が仕事を開くことなのです。仕事を閉ざすと行き詰ります。職員はどうしていいかわからなくて、子どもを苦しめるか、子どもの言いなりになるか、バーンアウトします。仕事を開くことがいかに重要であるか、そしてそのためには集団養育がキーポイントであることはお分かりになっていただけたと思います。

心にどうやって働きかけたらいいでしょう。それは、子どもが夢中になる機会をたくさんつくることです。その時、子どもは心を開きます。子どもと一緒に全力でかかわって、心を開いた機会を職員が共有することこそ、職員の心と子どもの心が感応同行して、心に変化するかも知れないのです。頑固な心と向き合うことこそ（子どもの心は頑固ですし、職員自身の心も頑固です）、この仕事の中心であることを知ってください。

里親委託や小舎制施設での養育が子どもの最善の利益であると唱えている人は、「そうならいいなあ」とか「きっとそうだろうなあ」と考えているだけで、実際にやってみたら「そうだった」ではないのです。ずるいです。愛育園の実践は「そうだった」ことを子どもの事実で示しています。それは、きっと今日の交流で分かったでしょう。

3 について

この仕事は子どもの心の形成であることを知れば、食事の重要性はお分かりになるでしょう。それは片手間で作れる仕事ではありません。季節に合った、行事に合った、誕生日には誕生日の、心のこもった手作りの食事を用意してあげることこそ、子どもの心の形成には重要です。それは、専門家でなければできないのです。

子どもの心に働きかける直接支援職員の仕事も同じですね。日々、そして時々刻々を全力で子どもたちと関わってあげることこそ重要でしょう。

食事の支度を手伝うことが、子どもの将来にとって重要で最善の利益であると考えている人はいませんか？そんなことを子どもが喜ぶでしょうか。手伝ってほしいという大人の願望ではありませんか。自分の思うようないい子にしようと思っていないですか。「子どものため」と言いながら、よくよく考えると「自分のため」である社会的養育従事者がとても多いことを知ってください。そして自分を反省してください。顧みてください。その結果を被るのは子どもなのです。

皆さま、どうか社会的養護に委ねられる子どもたちのためにお考え下さい。子どもたちの幸せを願っています。